

## 信濃平スキー場の開業と廃業に伴う 長野県飯山市外様地区の変化

矢ヶ崎太洋

長野県飯山市外様地区の信濃平スキー場は、スキーブームの終焉を受け、経営不振に陥り廃業した。信濃平スキー場は住民主体で開発されたスキー場であり、住民の生活と結びついた半農半宿の産業形態であったため、スキー場の廃業は地域経済に負の影響を与えた。本研究は、冬季観光であるスキー観光だけでなく、夏季観光や農業も含めた地域社会における通年の経済活動サイクルに着目することにより、信濃平スキー場の開業と廃業に伴う地域の変化を明らかにすることを目的とした。信濃平スキー場の開業により夏季観光の発展も促進され、多様な観光資源が整備された。信濃平スキー場の廃業により、夏季観光と農業が主要な産業となった。一方で、かまくら祭りはスキー観光時代の遺産であり、現在でも冬季の観光資源として機能している。ただし、民宿経営者の高齢化と後継者不足により、民宿が減少した。

キーワード：スキー場の廃業、信濃平スキー場、地域変化、観光資源

### I はじめに

信濃平スキー場（旧黒岩スキー場）は長野県飯山市に存在したスキー場であり、スキーブームの最盛期には多くのスキーヤーがゲレンデを賑わせた。しかし、スキーブームの終焉とともに、信濃平スキー場を含めた多くのスキー場が休業および廃業を余儀なくされた。スキー場の廃業など、観光地における観光資源の消滅もしくは衰退は、地域社会に経済的な負の影響を与える。本研究は、スキー場の廃業という観光資源の喪失に直面した地域社会の対応と変化を考察する。

日本におけるスキー観光は、スキー技術の導入（1911年ごろ）、第一次スキーブーム期（1955～1980年）、第二次スキーブーム期（1980～1993年）を経て、スキー観光衰退期（1993年以降）へ移行した（呉羽, 2009）。呉羽（2014）は、2012年までに日本全国に開業したスキー場のうちで40%弱が廃業・休業していることを指摘するとともに、

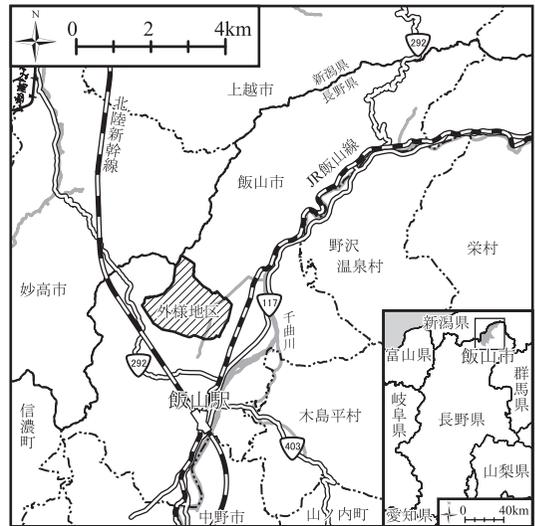
これらのスキー場の多くは、大都市に近接した地域において、都市資本によって開発された小規模スキー場や市町村営のスキー場であることを明らかにした。これらの要因として、スキーブームの終焉や経済不況によるスキー観光客の減少に加え、近接逆転効果の作用によって不人気なスキー場が淘汰されたことを指摘している。これらのスキー場の多くは、経営難を理由とした廃業と休業であるが、地域社会にとっては冬季の産業の喪失を意味する。特に地元が主体となって開発、出資、運営を行ってきたスキー場（石井, 1977）の場合は、観光産業が地域社会と密着しているため、廃業・休業の影響はより大きくなる。

観光地の発展と衰退を考察する際に、観光学や観光地理学における数々の理論の中で、バトラーの提唱した観光地ライフサイクルモデルの議論（大橋, 2010）を参考にできる。Butler（1980）は、観光地のライフサイクルについて、開拓期、登場期、成長期、成熟期、停滞期を経て、回生、維持、

衰退のどれかに至るというモデルを提唱した。このモデルをスキー場に当てはめた場合、本研究で対象とする信濃平スキー場は、観光地のライフサイクルにおいて、衰退に至った事例として位置付けることができる。ただし、日本のスキー場に付随する民宿の多くは、冬季のスキー観光だけでなく、農業を含めた半農半宿という複合的な産業形態で成り立ってきた点は留意すべきである(白坂, 1976)。スキー場の廃業・休業の影響とこれによる地域社会の変化を分析・考察する場合、スキー観光を含めた冬季観光、夏季観光、農業の視点から分析を行う必要がある。

本研究は、長野県飯山市外様地区にかつて存在した信濃平スキー場の開業と廃業に伴う地域の変化を明らかにすることを目的とする。冬季観光であるスキー観光だけでなく、夏季観光や農業も含めた地域社会における通年の経済活動のサイクルに着目することにより、スキー場の開業と廃業の影響を明らかにする。Ⅱでは、信濃平スキー場(開業当時は黒岩スキー場の名称)の開業から廃業までの期間における冬季観光、夏季観光、農業について分析を行う。分析と考察にあたっては、現存する民宿への聞き取り調査、スキー場ガイド、信濃平スキー場の資料を活用する。特に、足立(1992)は信濃平スキー場の開業経緯とその発展について、スキー場開業の中心人物の一人であった足立寅夫氏の自伝を交えてまとめており、大いに参考にした。Ⅲでは、信濃平スキー場の廃業から現在までの冬季観光、夏季観光、農業について分析を行う。現在営業中もしくは近年まで営業していた民宿への聞き取り調査や、信濃平スキー場の拠点となった外様地区顔戸の土地利用調査を実施した。Ⅳでは、ⅡとⅢに基づいて、信濃平スキー場の開業と廃業が外様地区に与えた影響と地域の変化を考察する。

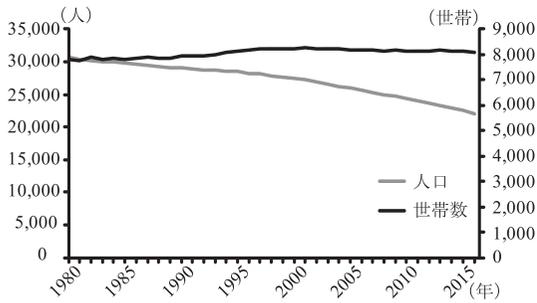
本研究の対象地域である長野県飯山市は、面積202km<sup>2</sup>、人口22,094人(2016年4月現在)で、長野県の北部に位置する(第1図)。飯山市街地は千曲川の沖積地に位置し、西の関田山脈と東の三国山脈に囲まれており、冬季は日本海からの季節



第1図 研究対象地域(2016年)

風の影響を受けることから日本有数の豪雪地帯である。主要幹線は、飯山市の中心を通り南北を結ぶ国道117、292号線と、東西を結ぶ国道403号線である。鉄道に関しては、JR飯山線が南北を結び、2015年には北陸新幹線の開業により利便性が向上した。飯山市は1889年に飯山町として発足した。1952年に飯山町、秋津村、柳原村、外様村、常盤村、瑞穂村、木島村が合併し、2年後の1954年の太田村と岡山村の編入によって、現在の飯山市域が形成された(春日, 1964)。飯山市は人口減少を経験している地方都市であり、1980年から2016年までの減少率は28%である(第2図)。一方、世帯数では1980年から2016年までに302世帯が増加しており、1世帯あたりの構成員数が減少している。主要産業としては、稲作を中心とした農業、飯山仏壇や内山紙などの伝統工芸、自然資源を利用した農業体験やトレッキングなどの夏季観光、スキーやスノーボードなどの冬季観光が挙げられる。

豪雪地帯である飯山市には、斑尾高原スキー場、サンパティックススキー場、戸狩温泉スキー場、北竜湖スキー場、飯山国際スキー場、信濃平スキー場、小境スキー場が存在した。第3図が示すように、スキーブームを巻き起こした映画「私をスキーに連れてって」が公開された1987年から入込客数



第2図 飯山市の人口と世帯数の推移

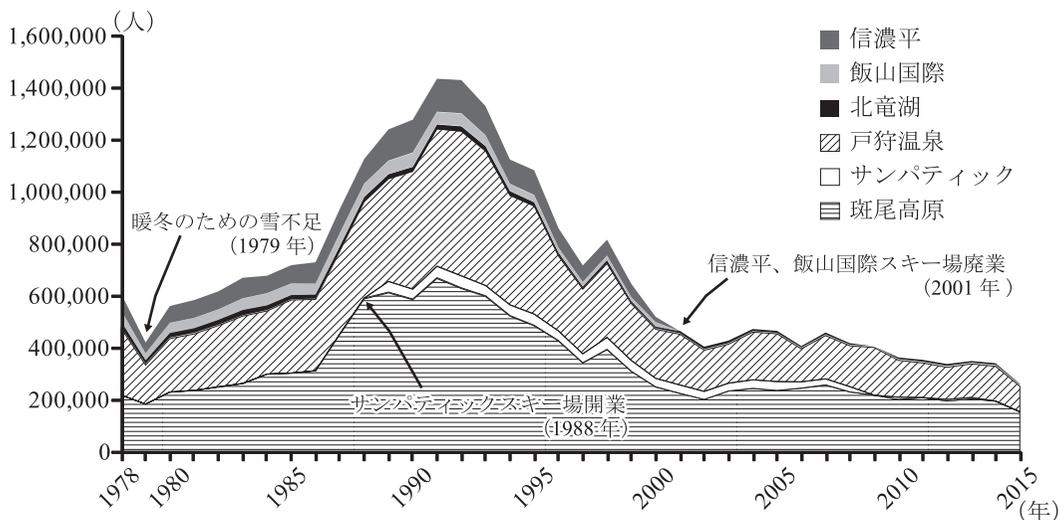
注) 1980年のみ10月末日のデータを利用し、他は4月末日のデータを利用した。

(住民基本台帳より作成)

が急増し、1991年に飯山市内のスキー場の総入込客数が最大となった。その後は、スキーブームの終焉とともに入込客数が減少し、2001年に信濃平スキー場と飯山国際スキー場が廃業に至った。現在も営業を続けている斑尾高原スキー場と戸狩温泉スキー場は、一定の入込客数を維持しているが、サンパティックススキー場や北竜湖スキー場では入込客数が激減している。入込客数が激減した2つのスキー場は規模が小さく、前述の呉羽(2014)

が指摘した近接逆効果の影響を受けていると推察できる。

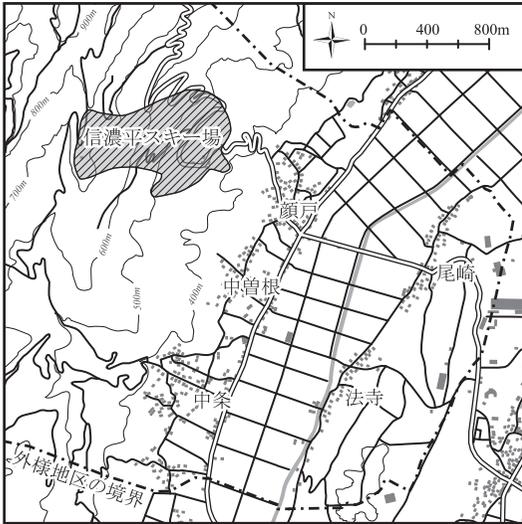
信濃平スキー場が位置した外様地区は旧外様村の範囲であり、顔戸、法寺、尾崎、中曽根、中条の5つの集落によって構成される。これらの集落は1872年の廃藩置県の布告時には村であったが、1877年に中曽根村、法寺村、中条村が合併して緑村に、同年に尾崎村、顔戸村が合併し寿村となった(春日, 1964)。1882年に中曽根村が緑村から分離したが、1889年に中曽根村、寿村、緑村が合併し外様村となり、飯山市と合併する1952年まで存続した。信濃平スキー場は顔戸の後背地である関田山脈の中腹に位置し、顔戸に民宿が集中した(第4図)。これらの民宿のおおまかなサイクルとしては、春季(5~6月)は田植えと農業体験、夏季(7~8月)は学生村や合宿の受け入れ、秋季(9~10月)は米の収穫と農業体験、冬季(12~3月)はスキー観光、4月と11月は次季への準備と季節の山菜およびキノコの採取である。信濃平スキー場は旧名称が黒岩スキー場であったように、関田山脈に属する国の天然記念物である黒岩山の斜面に形成された(写真1)。



第3図 飯山市におけるスキー場の入込客数の変遷

注) サンパティックススキー場は2011, 2014年のデータなし。

(飯山市資料より作成)



第4図 飯山市外様地区の範囲と信濃平スキー場の位置

注) 信濃平スキー場の範囲は2001年の廃業時のもの。

## II 信濃平スキー場の開業から廃業までの地域の変化

### II-1 信濃平スキー場の開業と廃業

飯山市にスキー技術が導入されたのは1912年のことで、オーストリア軍人のテオドール・エードラー・フォン・レルヒ（通称レルヒ少佐）が10人の日本軍人にスキーの訓練を施した。その後、スキー技術が日本全国に普及していった（飯山市、2012）。しかし、外様地区顔戸にスキーが普及することはなく、豪雪地帯の農村に過ぎなかった。スキー場開業以前の外様地区では冬季の副業として、生糸の生産を目的とした養蚕業（1882年ごろ～1930年ごろ）、畳表の製造（1860年ごろ～）、商業的な蓑蓑の製造と販売（1912年ごろ～1960年ごろ）が行われた。しかし、収入は十分ではなく、出稼ぎとして、静岡でミカン収穫と缶詰工場で働いたり、諏訪の寒天工場で寒天製造に従事した（江口、1957）。

1956年には全日本スキー選手権および国民体育大会スキー競技長野県予選の会場として、また、1957年には第6回全国高校スキー大会のアルペン会場として黒岩山の斜面が選ばれ、参加した選手



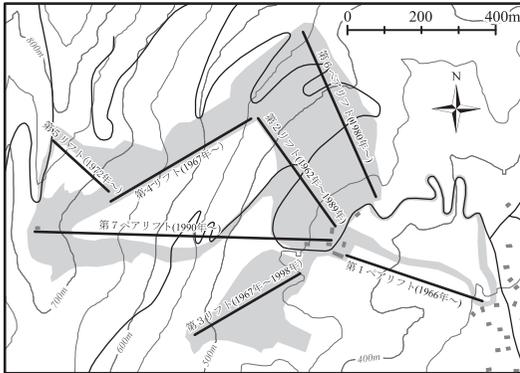
写真1 現在の信濃平スキー場と外様地区顔戸の全景

注) 左が黒岩山、右が鷹落山、中腹の草原が信濃平スキー場の跡地、麓に顔戸の集落が広がる。

（著者撮影2016年7月）

を顔戸の住民が分担して民家に宿泊させた。これがスキー場開業への足掛かりとなった。足立（1992）によると、当時の外様地区を含めた飯山市では、酷雪による冬季の出稼ぎが若者の一時的な転出を引き起こし、冬季における地区内の産業の確保が重要な課題とされた。スキー場の建設はこれらの課題の解決策の一つであった。

1959年に黒岩観光協会が住民の出資によって設立され、「黒岩スキー場」の名称で開発が始まった。1960年には民宿とスキー場の営業が開始された。当時はロープトウ<sup>1)</sup>とトロイカ<sup>2)</sup>を用いたスキー客の輸送を基本とした。なお、当時の顔戸の民宿への交通は、JR信濃平駅からの馬ソリであり、バス交通が整備された1962年まで運用された。スキーリフトの整備は1962年のスキーリフト会社設立によって始まり、同年に第2リフトが完成し、以後、ゲレンデとスキーリフトが開発された（第5図）。1971年に「黒岩スキー場」から「信濃平スキー場」へ名称が変更され、信濃平駅の最寄りであるというイメージの改善が図られた（同時に「黒岩観光協会」から「信濃平観光協会」に名称が変更）。1980年には国際交流を目的としてスイスのグレーヘンスキー場<sup>3)</sup>と姉妹提携した（足立、1991）。グレーヘンスキー場との姉妹提携におい



第5図 信濃平スキー場のゲレンデとリフトの開発  
(聞き取り調査, 鉄道要覧より作成)

て、スキー場の規模こそ異なるものの、ゲレンデの形状と発足経緯が似ていたことが決め手となった(足立, 1992)。以後、定期的に交流訪問やスキーインストラクターの派遣が行われた。

信濃平スキー場は1992年にスキー入込客数が最大の127,200人を記録したが、スキーブームの減衰により、その後、徐々に減少した(前掲の第3図を参照)。この入込客数の減少を受けて、1998年にかまくら祭りが開始され、1999年にスノーボード用コースの開設などの振興策が図られた。

しかし、2001年に信濃平スキー場は廃業するに至った。廃業の主な理由としては、入込客数の減少に対し、経費の削減や広告の成果が現れず、スキー場の赤字が拡大し続けたためであった。なお、スキー場の存続を望む意見もあったが、負債を最小限に抑え、廃業後の冬季の観光事業としてかまくらを観光資源とすることで合意形成が図られた。廃業時の負債は約5億円ほどであり、株主であった住民が分担した。

信濃平スキー場の位置する黒岩山では、現地でワヤと呼称される雪崩災害が定期的に発生し、住民だけでなくスキーヤーが犠牲になる事例もあった。黒岩山の雪崩をまとめた第1表を見ると、1892年から1998年までの約100年間に、黒岩山では計8回の雪崩とこれに対する防災工事が3回実施された。スキー場が開業した1960年以前は、集落に達する雪崩は2回あったが、スキー場の開業以降はスキーヤーの被害が増えた一方で、集落に達する雪崩は発生しなくなった。防災工事は黒岩山の上部から行われ、1998年の雪崩防止柵の設置により雪崩は発生しなくなった。しかし、この雪崩防止柵の設置の3年後に信濃平スキー場は廃業している。

第1表 黒岩山の雪崩と防災工事の歴史

発生年	種類	詳細
1892年	雪崩	数軒の車屋が全壊
1935年	雪崩	被害なし
1937年	雪崩	被害なし
1940年	雪崩	住民2人、牛1頭が死亡。全壊2軒(内1軒は蓮華寺本堂)、半壊1軒
1941年	防災工事	黒岩山の上部において小規模な雪崩防止工事を実施
1969年	防災工事	黒岩山の上部において雪崩防止工事を実施
1970年	雪崩	リフト点検中の従業員が巻き込まれ、従業員1人が死亡、2人が重軽傷
1975年	雪崩	被害なし
1978年	雪崩	リフトの監視小屋、食堂が被害を受け、スキー観光客1人が死亡
1985年	雪崩	スキー観光客30人が巻き込まれ、1人が死亡、児童7人が負傷
1998年	防災工事	黒岩山中腹に雪崩防止柵を設置

(栗岩(2009)より作成)

## II-2 夏季観光の開始とその変化

黒岩スキー場の建設は外様地区における民宿街の形成を促したが、これらの民宿は冬季のみに営業されたわけではなく、夏季の観光にも利用された。1960年に民宿の営業が始まった当初は、受験を控えた都会の学生が勉強を目的として民宿に宿泊する「学生村」が行われた。1965年ごろから大学生や高校生の合宿地へと発展し、軽音楽や合唱などの文科系部活動、弓道やバレーボールなどの体育系部活動が利用している。こうしたサークルはリピーターであるとともに、口伝えて民宿の良さが広まった。新規の合宿の場合は信濃平(黒岩)観光協会が民宿を斡旋し、人数が多い場合は複数の民宿に分宿した。これらの合宿客は2回目以降は1回目に宿泊した民宿のリピーターとなり、各民宿の夏季観光の重要な顧客となった。こうした合宿は信濃平スキー場の廃業後も継続的に行われた。

外様地区北部の黒岩山は1971年に天然記念物に指定された。黒岩山は温帯と冷帯の中間地に位置し、多種多様な動植物が生息することが評価された。特に温帯に生息するギフチョウと冷帯に生息するヒメギフチョウの混生が有名であり、これらの種と自然環境の保護活動が行われている(森本, 1987)。保護活動は住民主体で行われ、ギフチョウの幼虫のエサであるカンアオイとヒメギフチョウの幼虫のエサであるウスバサイシンの生育環境の整備、急激に減少したヒメギフチョウの人工飼育が主である。これらの活動が必要になった背景として、1955年ごろからの石油燃料の普及により薪炭材の需要が低迷し、山林が荒廃した。黒岩山ではこれらのチョウの観察会、トレッキング、カタクリ観察などが行われ、夏季観光における重要な観光資源であった。なお、ギフチョウは飯山市のチョウとして指定されている。

飯山市グリーンツーリズム推進協議会が1994年に発足し、これを受けて信濃平観光協会は小学校の環境教育を目的とした修学旅行を受け入れ始めた。外様地区においては、主に横浜市の環境教育や武蔵野市のセカンドスクールが実施され、小学

校は毎年外様地区を利用するリピーターとなった。天然記念物黒岩山、広井川を中心に広がる田、昔ながらの素朴な民宿は、小学生の環境教育にとって最適な環境を提供した。田植えや作物の収穫などの農業体験、都会には無いおやきや笹寿司などの郷土食文化体験、黒岩山の自然を利用したトレッキングや自然観察などの自然体験が行われた。民宿の主人や家族との交流が重視され、多数の児童を1カ所に集めて宿泊させるのではなく、複数の民宿に分散する分宿の形態が一般的であった。

また、1983年には、顔戸から見て広井川対岸の長峰に、ハンググライダーの製造を行うファルフォークの工場と同社の運営するハンググライダー学校が設置された。ファルフォークが長峰に設置された理由としては、1981年に黒岩山の北部にある鷹落山で開催されたハンググライダー日本選手権が挙げられる。この大会とファルフォークの設置以降、鷹落山に発射台(写真2)が、広井川周辺に広がる田の一部に着陸場が整備され、ハンググライダーを目的とした観光客が来訪するようになった。ファルフォークが長峰に立地する以前は、発射台は飯山市街から千曲川を挟んだ野坂田の工業団地に立地した。なお、ファルフォークは大阪に拠点を置く帝人株式会社を買収され、帝人ファルフォークとなり、1995年に長峰から工場を撤退した。



写真2 鷹落山のハンググライダー発射台

(著者撮影2015年10月)

## II-3 農業の変化

外様地区では古くから稲作を中心に、大豆などの雑穀が栽培されたが、1930年ごろには養蚕やホップなどの換金作物の栽培が行われていた。稲作は外様地区では盛んに行われ、1945年ごろには総農耕地約300haの3分の2が水田であった（塩川，1989）。大豆栽培は1930年に最盛期となったが、換金率の低さから徐々に減少し、1951年にはほとんど見られなくなった。養蚕は1882年ごろに最盛期を迎えたが、1940年ごろから徐々に生産が減少した。ホップは1916年ごろから大日本ビールとの契約によって始まり、養蚕の衰退を受けて栽培農家が増え、1937年ごろが最盛期であった。しかし、第二次世界大戦によって大きく減少した。第二次世界大戦後は、葉タバコ、キノコ類、アスパラガスが換金作物として多く生産された（飯山市，1995）。葉タバコは1955年ごろから栽培が増加し、1985年ごろまで盛んであった。キノコ類に関しては、1971年ごろからエノキダケ生産が急速に増加した。アスパラガスの栽培は1975年ごろに始まり、主要な換金作物へ成長した。農林業センサスによると、外様地区の1950年の主業農家率は92.0%におよんだが、徐々に主業農家率が低下し、1990年ごろには40.8%まで減少した。住民の副業化が進展したといえる。

聞き取り調査をおこなった4軒の民宿（第2表）の畑作の歴史を整理してみよう。Aは1940年まで生糸の生産を目的とした養蚕を行ったが、生糸価格の低下への対応として、1935年ごろから付加価値の高いリンゴの生産を始めた。当時は、リンゴは換金作物として珍しく、冬季の積雪への対

策技術が進んでいなかったため、雪による被害が大きかった。リンゴは1975年ごろまで続け、それ以降、アスパラガスの栽培を始めたが、1985年ごろにやめた。その後は、自家消費および宿泊者向けの農業に移行した。なお、1985年ごろに民宿の横にあったリンゴ樹園地を弓道場に変更した。BとCの畑作に関しては、民宿用と自家消費を目的とした自給的な農業が行われた。Cは民宿の開始以前はチョウセンヒメユリ、バラ、キクなどの花卉栽培を行っていたが、民宿の開始に伴い、民宿と自家消費用の畑作に移行した。Dは民宿の開業以前の1959年ごろまで養蚕を行っていた。その後、1963年ごろに葉タバコの栽培を始めたが、1970年ごろにやめた。1975年から2005年までアスパラガスを栽培したが、病害によりやめ、これを機に民宿用、自家消費、農業体験を目的とした農業へ移行した。

## III 信濃平スキー場の廃業から現在までの地域の変化

### III-1 かまくら祭りの継続とその影響

信濃平スキー場の廃業後、信濃平観光協会は冬季の観光資源が失われることを危惧し、新たな冬季観光資源としてかまくらを主力とすることを決めた。外様地区におけるかまくらは、1995年ごろにリフト乗り場の横にある蓮花寺の庭で、観光客向けの写真撮影スポットとして製作されたことが始まりである。かまくらの観光資源としての活用は1998年ごろに始まった。信濃平スキー場の廃業後は、県道409号線沿いの平地に「かまくらの里」が作られた。飯山雪まつりと同時期の2月中旬に「かまくら祭り」が開催されている。

外様地区のかまくらは、雪を積み固め雪洞を掘るという通常の方法とは異なり、「かまくらくん」と呼称される風船を利用して製造される。この技術により、容易かつ迅速に頑丈なかまくらを製造できるようになり、かまくらの観光資源化が可能になった。具体的なかまくらの製造手順としては、かまくらくんを膨らませ、この上に除雪機や人力

第2表 調査した民宿の属性

開業年	閉業年	民宿施設
A 1964年	営業中	弓道場(1985年～)、ピアノ音楽ホール(1981年～2011年)
B 1961年	2011年	洋弓場(1990年～2000年)
C 1960年	営業中	ピアノ2台(1965年ごろ～)
D 1962年	営業中	田舎暮らし体験

(聞き取り調査より作成)

で雪を積み上げ、シャベルや体重を用いて雪を固める。最後に、入り口となる雪洞を掘り、かまくらくんの空気を抜くことでかまくらが完成する。かまくらくんの風船生地にはハンググライダーの布加工技術が応用されており、外様地区のファルフォークがこの技術開発に貢献した。この手法で製造されるかまくらは、人間の重さに耐え、中で鍋料理をしても崩れない特徴を持つため、全国的に有名となった。かまくらは雪が降り始める頃に毎年30基ほど製造され、かまくらの里として冬季の観光シーズン中は設置されたままとなる（写真3）。飯山市の雪祭りの一環としてかまくら祭りは重要な観光資源となっている。

2011年ごろに信濃平観光協会が解散すると、かまくらの製造と利用は外様地区に移管され、かまくら祭りは地区の祭りという位置づけへと変化した。信濃平観光協会では青年部がかまくらの製造を担ったが、外様地区への移管後はかまくら応援隊がかまくらの製造を担っている。かまくら応援隊は顔戸の住民を中心とした20人程度で構成され、その多くは年配の住民である。外様地区で開発されたかまくら製造技術は、その容易性から年配の住民でも製造できる上、一旦製造すれば冬季間はずっと維持することができる。

かまくら祭りは飯山市の雪祭りと同じく2月中に2日間開催され、この時期に開催される信州い

いやま観光局が企画する旅行商品「レストランかまくら村」が観光客を引きつける。個人予約、報道取材、宿泊プランを含めて、2013年度は1,063件、2014年度は1,271件、2015年度は2,223件、2016年度は2,084件（積雪が少ない影響を受けた）と、徐々に観光客は増加傾向にある。これに加えて、かまくら祭りの期間外においても、立ち寄りでかまくらを見物する観光客、報道関係者の来訪があり、露店やイベントなどで賑わう。飯山市は、2016年にはかまくらくんの追加製造やトイレの整備など、かまくら祭りに対してインフラ面での支援を行っている。

### Ⅲ-2 夏季観光と民宿の衰退

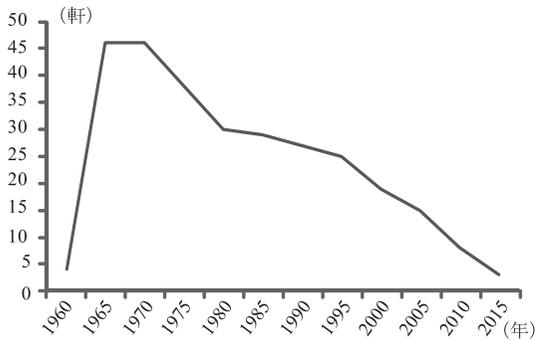
信濃平スキー場の廃業後においても、学生合宿、小学生の環境教育、ハンググライダーなどの夏季観光は引き続き行われた。信越トレイル協議会が2000年ごろに発足し、外様地区では関田山脈の黒岩山間区間が該当し、3軒の民宿が協議会に加盟した。信越トレイル協議会に加盟した民宿には、トレイルと民宿間の送迎が義務付けられ、年に4～5件の登山者の送迎が行われた。

また、天然記念物黒岩山の自然保全を目的として黒岩山保全協議会が2004年に結成され、黒岩山の山林整備と植生の維持が顔戸を中心とした住民主体で行われている。活動内容としては、黒岩山



写真3 かまくらの里とかまくら祭の様子

(著者撮影2017年2月)



第6図 顔戸と尾崎における民宿数の推移

注1) 1979年以前は足立(1992)を参考にし、1980年以降は保健所の資料利用した。

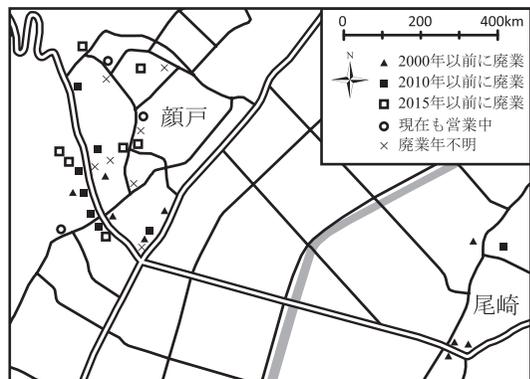
注2) 1975年は1970年と1980年からの推計値を採用した。

(聞き取り調査、保健所資料より作成)

の約80haにおいて、年に5～8回ほど10人前後で、倒木の処理や下草の刈り払いなどの山林整備が行われている。

信濃平スキー場の廃業後は夏季観光が中心となったが、外様地区の観光は徐々に衰退し、2011年ごろに信濃平観光協会が解散に至った。民宿数の増減を示した第6図をみると、1965年ごろが最盛期であったが、第一次スキーブーム(1955年～1980年)の終盤に大きく減少し、第二次スキーブーム(1980年～1993年)には減少が緩やかになった。しかし、ブーム終了に伴い再び減少が始まり、信濃平スキー場が廃業した2001年以降も減少を続け、現在では3軒が営業するのみである。民宿数が10軒を下回った2007年ごろには大人数の小学生の環境教育研修の受け入れができなくなり、研修地は戸狩などへ移った。民宿の分布とその廃業年を示した第7図をみると、2000年以前に廃業した民宿は尾崎に集中しており、信濃平スキー場から離れていることが影響したと推測できる。信濃平スキー場に近接した民宿の廃業年と分布には関連性がなく、聞き取り調査によると、民宿の廃業の理由は住民の高齢化と後継者の欠如であった。

聞き取り調査をおこなった4軒の民宿の歴史と属性をまとめた前掲の第2表をみると、いずれの民宿も黒岩スキー場の開業から数年以内に開業し



第7図 信濃平スキー場周辺の民宿の分布と廃業年  
(聞き取り調査、保健所資料より作成)

ている。ただ、開業年が遅いAは冬季の産業として家内制絹織物生産を行っており、冬季に安定した収入があった。しかし、スキー場利用者の増加に伴い、住宅の一室を提供したことから民宿業を開始した。なお、絹織物生産は1965年ごろに終了し、民宿業へ一本化した。現在も営業中の民宿は3軒存在する。2011年に廃業したBの理由は、跡継ぎが他市へ転出したためである。リピーターであった学生サークルや部活動へ1年以上前に告知するというように、廃業は計画的に行われた。

4軒の民宿には夏季観光のリピーターがいるが、その設備によってリピーターの属性が異なる。例えば、Aの場合は弓道場があることから、大学や高校の弓道部がリピーターであった。弓道場を有する民宿は少なく、Aの経営者が弓道場の設置を決定すると、エージェントを介して多数の大学や高校が下見に来た。ハンググライダーを目的とした観光客もこれらの民宿を利用するが、特にCはハンググライダーや備品が格納されている信濃平スキー場のレストハウスの鍵やその他の管理の代行を行っている。Dは田舎暮らしの体験に力を入れており、飯山市の移住定住促進プログラムの一部の受け入れも行っている。これらの体験者はリピーターとなることが多いという。

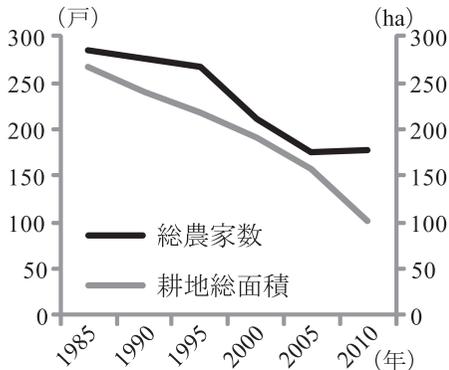
信濃平スキー場の民宿街である外様地区顔戸の2016年における土地利用(第8図)を見ると、県道409号線の北西に住宅が広がり、畑がモザイク



第8図 外様地区顔戸の土地利用図

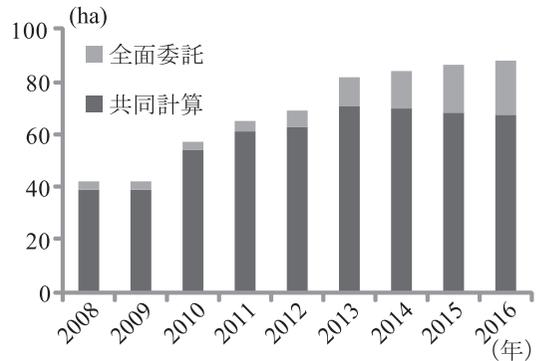
注) 調査は2015年10月と2016年5月に実施し、調査者と製図者ともに著者である。

(2015年10月と2016年5月の現地調査より著者作成)



第9図 外様地区における農家数と耕地面積の推移

(農林業センサスより作成)



第10図 株式会社外様における共同計算と全面委託面積の推移

(株式会社外様の提供資料より作成)

状に分布している。この土地利用図では、民宿の営業実態を反映させるために、看板を掲げているものの廃業している民宿を記載している。外様地区の景観には、民宿の名残を認めることができる。

### Ⅲ-3 外様地区の農業の変化

外様地区の農家数と耕地面積の推移を示した第9図を見ると、ともに減少していることがわかる。米価格の低下と、それに伴う後継者不足と農業従事者の減少が原因であった。これは外様地区だけでなく全国的な動向であり、その対策として農業の効率化が推進された。

外様地区では、2011年に外様営農組合が株式会社外様となった。株式会社外様は田や畑を所有する株主242戸、非常勤役員5人、幹事2人、事務員1人、社員2人、有期契約労働者40人の体制で運営され、種苗栽培、水稻栽培、圃場整備、畑作の委託作業を中心におこなっている。水稻栽培に関しては、1年契約を基本として田植えから収穫までのすべてを委託する全面委託、田植えと収穫を委託する共同計算、より部分的な作業を委託する部分委託に大分される。委託する作業の量に応じて配当が変化する。例えば、全面委託の場合は10a当たり1俵の価格が配当となる。第10図を見ると、2008年から2016年までに共同計算と全面委託の面積が2倍となっており、特に全面委託の

面積は急増した。株式会社外様への聞き取り調査によると、株主の高齢化が全面委託の増加に寄与しているという。株式会社外様で栽培された米はJA北信州みゆきに出荷されるが、2014年からは、かまぐらの里米という商標で特選米を販売している。畑作に関しては、2015年に麦類を10.5ha、そばを2.2ha、大豆を0.4haほど生産した。

一方、OSK（オペレーター水稻組合の略）は、1995年ごろに水稻栽培の委託耕作を目的として、外様地区の7人によって結成された。当初は中古の田植え機械を7人の出資によって購入し、10haほどの面積を5年あるいは10年の契約で全面委託の形で請け負った。2005年ごろに農事法人化した。その後の耕作面積の推移を見ると、2005年ごろに25ha、2010年ごろに41ha、2015年ごろに36haほどであった（OSKへの聞き取り調査より）。OSKはオペレーターの集団であるため、全面委託のみの委託耕作である点、契約期間が長い点、雇用形態が通年雇用である点で株式会社外様とは異なる。OSKは第11図に示した水田を管理しており、契約期間などにより毎年耕作する場所が異なるため、水田は分散している。この図には休耕地も含まれ、食用米（コシヒカリ、あきたこまち）、飼料用米、モチ用米が栽培されている。



第11図 OSKの耕作地の分布（2016年）

（OSK提供資料より作成）

#### IV 信濃平スキー場の開業と廃業が外様地区に与えた影響

外様地区の冬季観光において、信濃平スキー場は、冬季の出稼ぎに代わる経済活動の一つとして、住民主体で開発された。信濃平スキー場は雪崩の災害リスクを抱えたが、スキー観光客が順調に増加した。それに対して民宿数は、新規参入が少なかったため減少傾向にあった。冬季観光を目的として始まった民宿が通年の稼働を目指して夏季観光を推進し、天然記念物黒岩山の自然を利用した自然体験教室、学生合宿、ハンググライダーなどが発展した。外様地区の農業については、稲作を中心として、換金作物であるアスパラガスやキノコ類などが栽培されたが、民宿の経営が始まると、換金作物の栽培から宿泊客向けの自家消費用野菜の栽培へ移行する傾向が見られた。その結果、外様地区の民宿では、冬季と夏季を含めた多様な観光資源が活用され、農業を含めて、通年で収入が得られる仕組みが整備されるようになった。

信濃平スキー場は1992年に観光客の最盛期を迎えるが、第二次スキーブーム終了による観光客の減少に歯止めがかからず、2001年に廃業を余儀なくされた。赤字の拡大に歯止めがかからないことが懸念されたことから、スキー場の株主である住民の合意形成が得られ、信濃平スキー場は40年の歴史に幕を下ろした。信濃平スキー場の廃業後の冬季観光の後継とされたのが、かまくらであった。ハンググライダーの布を使用したかまくら製造技術が外様地区で開発された。この技術で製造されたかまくらは頑丈で、かまくら内で鍋料理ができることが全国的に大きな話題となり、スキー場廃業後の冬季の宿泊客の維持に貢献することが期待された。しかし、かまくら祭りなどのイベント時期は民宿の宿泊客はいるものの、冬季を通しての宿泊客数はスキー観光よりも小規模であった。

夏季観光についてはスキー場廃業後も積極的に行われ、主に学生合宿や自然体験教室の団体客がリピーターとなった。小学校や中学校が行う自然体験教室は、規模が大きく複数の民宿による分宿が行われたが、民宿経営者の高齢化と後継者不足

による民宿の廃業によって、収容力が減少したため、受け入れを中止せざるを得なくなった。こうした夏季観光と冬季観光の衰退において、民宿経営を補助した稲作の形態にも変化が生じた。株式会社外様やOSKの取り組みは、小規模の稲作から大規模かつ効率的な稲作への転換、田の所有者の株主化を意味しており、外様地区における民宿や各世帯の稲作の位置づけは変化している。

#### V おわりに

本研究では、信濃平スキー場の発展と廃業が外様地区へ与えた影響と地域の変化について、民宿経営に季節性をもたらす夏季観光、冬季観光、農業に着目して考察した。冬季における出稼ぎ以外の収入を確保するために、住民主体でスキー場が開発された。冬季の産業の不足は、淡野（1985）の指摘する地域の構造における空きであると解釈でき、外様地区の場合は冬季のスキー観光が空きを埋めることとなった。信濃平スキー場の発展と同時に、夏季観光として学生村や学生合宿が発展した。これらの発展後には、夏季観光の黒岩山、ハンググライダー、自然体験教室などの多様な観光資源が整備され、観光地として成熟した。この冬季、夏季における多様な観光資源は、それぞれが結びつき、観光地としての魅力を増幅するとともに、新たな観光資源を作り出した。外様地区の場合は冬季観光のスキーと夏季観光のハンググライダーが結びつき、新たなかまくら製造技術が発明されたことがその例である。

この観光地の開発、発展、成熟、多様化の流れにおいて、稲作は民宿の経済基盤としての役割を担い、畑作は自給農業へ転換するだけでなく、自然体験教室における観光資源となった。観光地化以前の産業がスキー観光と共存することは、呉羽（1991）による群馬県片品村のスキー観光地域の形成の事例と同様であろう。信濃平スキー場の廃業は、来訪するスキー観光客の減少によるものであるが、住民がこの衰退を受け入れた結果であった。一方で、外様地区の場合、冬季のスキー観光

の代替としてかまくら祭りに注力する形がとられた。しかし、スキー場ほどの経済的な波及効果はなかった。スキー場の廃業後は成熟した夏季観光が民宿の存続にとって重要であったが、夏季観光と農業だけでは収入が十分ではなく、息子世代が民宿業を継ぎにくい状況を作り出した。その結果として、観光による収入を支えていた農業の衰退とともに、徐々に民宿数も減った。外様地区を前述の観光地のライフサイクルモデル (Butler, 1980) に当てはめて考えた場合、大まかな開拓、発展、衰退の流れは参考にできる。しかし、こうした発展と衰退において、観光資源の多様化、民宿経営と農業の兼業化は、経済的なリスクを分散するという点で重要な意味を持ったと示唆される。

民宿は、経営者の高齢化と後継者不足により、2016年現在では3軒まで減少している。渡邊 (2015) は、山梨県山中湖村における保養所の変容を分類化した研究で、保養所の廃業は経営者の高齢化と後継者の不在、建物の老朽化を契機として発生しており、後継者の不在については家族の恒常的勤務と村外への流出が要因であると指摘している。外様地区の場合、スキー場の廃業と農業の衰退によって観光が低調になり、民宿の息子世代が後継者とならなかったと推察できる。冬季観光のかまくら祭りは、観光客に見せるための地域の祭事としての意味合いが大きく、以前の信濃平スキー場と比べると、観光資源としての役割は小さい。一方で、外様地区で開発された技術によ

て製造されたかまくらは、観光客を集客でき、飯山雪祭りの主要な観光資源の1つである。すなわち、かまくら祭りは信濃平スキー場の遺産といえる。

観光業が衰退する中で、農業は基礎的な収入源として機能してきた。飯山市の耕地面積や農家数は減少傾向にあるものの、株式会社外様やOSKの取り組みは農業の高効率化を実現した。吉田 (2012) の集約的農業地域における農地移動の研究は、大規模かつ効率的な農業における農地の移動が社会関係の影響を受けていると指摘する。外様地区の場合は、農地移動ではなく、株式会社外様やOSKが田畑の耕作権を流動化することにより、耕作放棄地の出現を防止する点で大きく異なっている。ただし、株式会社外様とOSKの設立経緯は異なり、稲作の全面委託という点で業務内容が競合することから、社会関係の影響があると考えられる。

外様地区は、信濃平スキー場の開業と廃業という点で、一般の農業集落とは異なる変化を経験した。スキー場の開発は夏季観光の進展を誘発し、民宿を中心とした産業構造へ転換した。スキー場の廃業と民宿数の大幅減少により、観光産業は衰退しているが、かまくらの里は地区住民を主体としたかまくら応援隊で維持されるなど、継続的な活動が行われている。かまくらという日本では数少ない観光資源をうまく活用し、住民の収入増や若年層の定着化に結び付ける新たな方策を検討することが求められる。

現地調査を行うにあたり、外様地区でお話をお聞かせいただいた鈴木氏、二宮氏、三橋氏、宮沢氏、平井氏、蓮花寺の田村氏、戸狩観光協会の佐藤氏に感謝いたします。また、飯山市役所、信州いいやま観光局、長野県北信保険福祉事務所、外様地区活性化センター、外様株式会社から資料を提供していただきました。記して謝意を表します。

#### [注]

- 1) ロープトウは環状のロープをエンジンなどの動力によって回転させる設備である。このロープをスキーヤーが掴むことで麓から山へ移動することができる。
- 2) トロイカは複数人が乗車可能なソリをエンジンなどの動力によって引っ張り上げるもので、スキーヤーを麓から山へ運搬する設備である。
- 3) スイスのグレーヘンスキー場 (Grächen Ski Resort) は1975年ごろに開業したスキー場であり、現在

でも営業が続けられている。

#### [文 献]

- 足立寅夫 (1991) : 『信濃平, グレーヘン姉妹スキー場10周年記念誌』信濃平観光協会.
- 足立寅夫 (1992) : 『村人たちがもどってきた-信濃平スキー場・村おこし物語-』章文館.
- 飯山市 (2012) : 『飯山スキー100年誌』飯山市.
- 飯山市 (1995) : 『飯山市誌歴史編 (下)』飯山市.
- 石井英也 (1977) : 白馬村における民宿地域の形成. 人文地理, **29**, 1-25.
- 江口善次 (1957) : 『外様村史』飯山市公民館外様支館.
- 大橋昭一 (2010) : 『観光の思想と理論』文眞堂.
- 春日佳一 (1964) : 『飯山市合併誌』飯山市.
- 栗岩 司 (2009) : 黒岩山の自然災害. 奥信濃文化, **11**, 13-16.
- 呉羽正昭 (1991) : 群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成. 地理学評論, **64A**, 818-838.
- 呉羽正昭 (2009) : 日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性. 地理科学, **64**, 168-177.
- 呉羽正昭 (2014) : 日本におけるスキー場の閉鎖・休業にみられる地域的傾向. スキー研究, **11**, 27-42.
- 塩川清人 (1989) : 『外様農業協同組合史』飯山市農協外様支所.
- 白坂 蕃 (1976) : 野沢温泉村におけるスキー場の立地と発展-日本におけるスキー場の地理学的研究 第1報-. 地理学評論, **49**, 341-360.
- 淡野明彦 (1985) : 沿岸域における民宿型観光地域の形成-三重県鳥羽市相模地区の事例-. 地理学評論, **58A**, 19-38.
- 森本尚武 (1987) : 『黒岩山II-保護増殖事業実績報告書』飯山市教育委員会.
- 吉田国光 (2012) : 集約的農業地域における社会関係からみた農地移動の展開-兵庫県南あわじ市上幡多集落の事例-. 人文地理, **64**, 103-122.
- 渡邊瑛季 (2015) : 山梨県山中湖村における保養所の特質とその変容. 地学雑誌, **124**, 979-993.
- Butler, R. W. (1980) : The concept of a tourist area cycle of evolution: Implication for management of resources. *Canadian Geographer*, **24**, 5-12.

# Discontinued Shinanodaira Ski Resort and Its Influences on the Local Community of Tozama District, Iiyama City, Nagano Prefecture

YAGASAKI Taiyo

The economy of a tourist destination depends on the number of visitors and the popular image as tourist activities play important roles in sustaining the local economy. In the tourist resort developed by local residents, they provide tourists with such services as accommodation, food, and recreation. In the case of seasonal tourism such as skiing, sea bathing and mountaineering, services are provided only at a busy time. An owner of a guest house in a ski resort grows rice and vegetables during the summer. The seasonality of works around the year has characterized the economy and culture of Japanese ski resorts built by local residents. However, many ski areas closed after the end of the ski boom period that lasted from 1960 to 1993, and the local economy declined. Thus, the development and discontinuance of a tourist resort affect regional economy and community. Analyzing the opening and closing of a tourist resort where several seasonal works were combined to sustain the household economy around the year can clarify the regional changes and problems that local communities are confronted with.

This study focuses on the Shinanodaira ski resort in Tozama District of Iiyama City, Nagano Prefecture. It was built by the local residents in 1960 and was closed in 2001. The ski tourism contributed to increasing residents' income during the winter, whereas, prior to the opening of the ski area, the population temporarily declined during winter season when many residents went out of the community to work for cash income. Farmers opened guest-houses to accommodate skiers. Around the same time, guest-houses began to accept study tour groups and sports training camps and to accommodate elementary and secondary school children in official environmental education programs during the summer. However, the number of skiers began to decline since 1990, and the ski resort eventually fell into the red. Consequently, the local residents decided to close the Shinanodaira ski resort in 2001.

The local residents chose the *Kamakura* Festival as an alternative winter tourism resource after the closing of the ski area. The *Kamakura*, a non-residential small snow shelter, in Tozama is harder as compared with those in other areas, so that tourists can enjoy cooking *Nabe*, a hot pot meal, inside the snow shelter. The economic effects of the *Kamakura* Festival are smaller than the ski resort that once dominated local economy during the winter. In the present day, the *Kamakura* Festival is a regional festival attracting a small number of tourists. Twenty-five guest houses at the time of the closure in 2001 continued to operate during the summer. However, many of these guest house managers had to

close the business eventually due to aging and the lack of successors. Now only three guest houses stay in business. The ski resort operated for forty-one years in the past exerted a great influence in the local community by promoting new attempts by local residents to maintain local community. The *Kamakura* Festival, a new winter event in the local community, is the legacy from the prospered ski resort period.

**Keywords :** Discontinued Ski Resort, Shinanodaira Ski Resort, Changing Local Community, Tourism Resource

